

平成25年度学校自己評価表《最終評価》

中長期目標 (学校ビジョン)	さまざまな教育活動を通して、21世紀の鳥取そして日本を支える人材の育成に努める。	今年度の重点目標	「しのめプロジェクト」の推進 1. 学力向上のための教科学習の充実と授業力向上 2. キャリア教育の充実 3. 文武両道を基本とした教育活動の推進 4. 生徒指導の徹底と健康・安全管理の充実
-------------------	--	----------	---

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 学力向上のための教科学習の充実と授業力向上	①自宅学習時間を増やすとともに、学習の質を高める。	○与えられた課題の取組み状況は良いが、主体的・計画的な学習は不十分である。 ○1・2年生の家庭学習が量的に要求水準に達しない傾向がある。 ○読書量が少なく、学習における基盤に弱さがある。	○生徒が自己の効率的な学習習慣・学習方法を確立する。 ○家庭学習を毎日計画的に行っている生徒が70%以上。 ○新書レベルの書物を継続して読める生徒の集団を作る。	○1・2年生に対し、予復習の課題を徹底指導(具体的且つ明確に周知)。 ○スタディサポートや自宅学習時間調査を活用し、生徒一人一人の学習実態に応じた有効な指導。 ○意欲喚起につながる面談の実施。 ○朝読書や図書委員会活動の活性化を通じて読書を啓発する。	◇学習習慣・学習方法が確立(生徒アンケート) (7月)1年46%,2年40%,3年60% (1月)1年45%,2年43% ◇家庭学習を毎日計画的に行う(生徒アンケート) (7月)1年61%,2年42%,3年57% (1月)1年55%,2年41% ○宅習時間調査の継続的な実施、学年の共通テーマに沿った個人面談の実施等により、学習習慣・学習方法が徐々に身につけている。 ○1・2年では、学習の大切さは感じつつも与えられた課題に終始し、授業での学習内容の定着に必要な学習量の確保や学習法の確立が不十分な生徒が多い。3年では主体的・計画的に学習を進められる生徒が多数をしめる。 ○朝読書に一定期間集団読書を取入れ、社会問題に視野を広げる機会とした。	C	○基礎学力の定着、応用力の養成、自主的学習態度の育成を図るべく、学年・教科間で連携し課題の難易度、頻度、分量について工夫する。 ○学習状況や学力の推移に応じたきめ細かい学習支援策を学年で企画・実施する。 ○朝読書に継続的に取り組む。
	②各教科ごとに学力実態を把握・分析した上で、学力向上プログラムを実践し、授業の質を高める。	○3年間の各時期において到達すべき学力、その育成プログラム、指導法等は各教科ごとに概ね共有されている。 ○授業に対する生徒の満足度は高い。知的活動が活性化され、学問への興味・関心や主体的な学習態度が育成される授業づくりが求められる。	○学力層に応じた適切な教科指導により学力向上が図られる。 ○授業に対する生徒の満足度が90%以上。 ○授業を通じて学問に対する興味・関心や主体的な学習態度が高まったと感じる生徒の割合が70%以上。	○進路指導委員会で学力を分析し、それをもとに教科ごとの有効な指導プログラム・取り組みを実践。 ○授業アンケートを授業の質的改善に活用。 ○授業力向上に向けた研修・研究活動の充実。	◇授業についての満足度(生徒アンケート) (7月)1年83%,2年84%,3年89% (1月)1年83%,2年84% ○学年毎に学力分析に基づき学力層別の指導方策も実施しているが、十分ではない。 ○授業に対する生徒の満足度は高く、丁寧な指導に対する評価は得られている。 ○生徒の主体的な学習活動を引き出す授業実践の点で工夫の余地がある。 ○校内外の研修や研究会へ参加する機会が増え、教員個々の力量向上に効果を上げている。教員間の共有は不十分。	B	○学力層に応じた指導ビジョンを明確化し、協働体制を整えて実効性を上げる。 ○上位層育成のビジョンも大切。 ○教科書の枠を超えて幅広い知を伝える授業を実践する。 ○入試問題研究をふまえた教科指導を通じて、学問への興味・関心を高める。 ○研修の成果を教科会等で共有する。
2 キャリア教育の充実	③高い志を持ち、自己の将来像を設計し、実現に向けて努力する力を育成する進路指導。	○自立した学習への取組みが進路決定期までずれ込む生徒が少なくない。	○(1年生)自分の適性を知り進路目標を持って、進路実現のために必要な学習内容・学習方法がわかる生徒が60%以上。 ○(2年生)職業や大学等の具体的な進路目標を持って、大学(学部・学科)の教育内容や入試制度がわかる生徒が75%以上。 ○(3年生)適性に応じた進路目標が設定でき、進路実現のための必要な学力がわかり、身につけようとしている。	○LHRや総合的な学習の時間を活用した進路プログラムにより、進路意識の向上を図る。 ○「鳥取学」校外学習、進路講演会など、校内外の教育力を活用し、生徒が高い志を持ち、将来像を描けるよう指導する。 ○進路選択や学部・学科研究に、言語技術教育の手法を取り入れた様式の進路資料を有効活用する。	◇左記の目標の達成度(生徒アンケート) (7月)1年50%,2年55%,3年86% (1月)1年53%,2年65% ○鳥取学や進路講演会などのキャリア教育プログラムを計画的に実施することで、生徒の進路意識、学習意欲が着実に育成された。 ○理数科では、大学との連携事業や企業・研究機関の訪問などの行事により進路意識の高揚が図られた。 ○学年が上がるにつれ、志高く「なりたい大人像」を描けている生徒が増加している。3年では担任の日常的な面談等の指導により学習方策を会得し、地道に取組み、適性に応じた進路目標を設定することができた。	B	○キャリア教育プログラムや面談を通して、自己の将来像を持たせる。 ○教職員が3年間のキャリア教育、進路指導の全体像を理解し、それらを学科・学年・教科で俯瞰しながら効果的に実施する。
3 文武両道を基本とした教育活動の推進	④学習と部活動の両立。	○学習と部活動をうまく両立させていると感じている部加入生徒(1・2年)が平成24年度末57%。	○学習と部活動をうまく両立させていると感じる生徒が70%以上。	○学級担任・教科担任と顧問の連携した指導の実践。 ○家庭学習を計画的に行う時間が確保されるよう、効率的な部活指導を展開。	◇学習と部活動の両立(生徒アンケート) (7月)1年69%,2年51%,3年65% (1月)1年66%,2年55% ○学習と部活動を両立させていると感じる生徒は前年度と比べて若干増えている。	B	○具体方策を継続実施する。
4 健康・安全管理の充実	⑤健康・安全に関する自己管理のできる生徒の育成。	○睡眠を中心とした体調自己管理が不十分で、保健室来室生徒が多い。 ○自転車乗車マナーについての指摘を受けることがある。登下校時の自転車による接触事故が十数件ある。	○各家庭における生活習慣(起床時間、帰宅時間、自宅学習開始時間、就寝時間等)を改善する。 ○自転車マナー向上と登下校時の事故減少。	○生活習慣の改善に向けて生徒保健委員会の活動を充実させる。 ○健康・安全についてPTAと協力した取り組みの実施。 ○登下校時の交通安全指導を適時実施。	◇起床・学習・就寝の時間を決めて実践(生徒アンケート) (7月)1年65%,2年54%,3年68% (1月)1年64%,2年56% ◇交通ルール遵守・マナー向上(生徒アンケート) (7月)1年97%,2年91%,3年94% (1月)1年97%,2年96% ○生活習慣の自己管理については、1・2年生のQCカード活用、生徒保健委員会の啓発活動、PTA健康生活部のアンケート実施など、教職員・生徒・保護者が連携して取り組めた。生徒の意識は徐々に高まったが、まだ十分な実践には結びついていない。 ○生徒風紀委員やPTA役員と連携してマナーアップ運動等の啓発活動に取り組み、ルール・マナーの意識は高まりつつあるが、自転車の交通ルール違反が見られる。登校時の自転車の接触事故も十件以上発生している。	C	○学校保健委員会の意見を、教職員・生徒・保護者がそれぞれの立場で実践に移す。 ○QCカードを活用し自己管理能力の育成を図る。 ○生徒の生活状況を把握し、こまめに声かけをする。 ○自転車の交通ルール遵守について、年度当初から学年集会等で指導する。 ○朝の登校指導を実施する。

評価基準 A: 十分達成(100%) B: 概ね達成(80%程度) C: 変化の兆し(60%程度) D: まだ不十分(40%程度) E: 目標・方策の見直し(30%以下)